

大阪を生きる 12人の物語 第6回

HOST 高島幸次

ゲスト 和田大象



「人」を通すことで見えてくる大阪の文化的魅力を探る対談連載『大阪を生きる12人の物語』。第六回のゲストは、「第六感料理」を打ち出す創作料理店「世沙弥」のオーナー・和田大象さん。HOSTはお馴染み、歴史学者の高島幸次さんです。

「決め打ち」と「いい加減」のフラフラ人生

高島 今日(きょう)は和田さんのお店、創作料理の「世沙弥」で対談を収録させていただくわけですが、和田さんといえは料理だけでなく、お能や落語、文楽、短歌など、さまざまな古典文化に精通しておられる印象があります。すし、現代美術のコレクターとしても有名です。それぞれ、どんな順番で関心を持たれていったんでしょうか。

和田 実家が胡麻を扱う乾物問屋だったので、食への興味が最初で、次に詩歌、映画、現代アートの順ですかね。古典芸能については、大学時代からお能をやってみましたから、能、歌舞伎、落語、文楽の順です。

高島 ご実家である「和田萬」は、明治十六年創業の老舗の胡麻問屋で。
和田 ご存じの通り、和田萬のある界隈は菅原町という、天満の中でも乾物の町ですね。

高島 菅原町には問屋街の面影を残す蔵が、いまでもとどこどこに残っていますよね。大学で能を始められたということでしたが、大学は東京だったとか。



承応2(1653)年に設立された天満青物市場から派生した菅原町の乾物問屋街。往時にはさまざまな乾物が集まり、江戸を中心とした全国へと出荷された。いまでも問屋街の面影が残り、和田さんご実家「和田萬」が経営する胡麻の店「萬次郎 蔵」も蔵をリノベーションして活用している

和田 僕は次男ですから、何代も続く家業の息苦しさから逃れるためというよりは、ボヘミアンとかノマドとか、あの時代特有の風来坊の自由さに憧れて東京へ行った感じでした。卒業後もすぐには帰らず、日活に入って映画関係の仕事でドラダラと続けて……。

高島 映画監督になりたかったんですか？

和田 一応そうなんですけど、当時は、映画を撮るには日活とか松竹とか、どこかの映画会社に入って助監督からやらなきゃ最後の時代で、入社試験で助監督を募集しているのが日活だけだったんです。最初は撮影所宣伝というところに回されて、「ロマンポルノに出ませんか？」って口説いた女優さんを『平凡パンチ』や『プレイボーイ』のグラビアページで脱がせるのが仕事でした。あとは、一番激しいベッドシーンの撮影があるときに、各新聞社に取材に来てもらったり。

高島 映画の前に、短歌へ興味を持たれたというお話でしたよね。

和田 大学五年のときに——五年行ってるんです(笑)——塚本邦雄の短歌と出会ったのがきっかけでした。和歌や古典文学にはまるで興味がなかったんですが、塚本邦雄は短歌だけじゃなく前衛芸術の世界にも通じ